

個別最適な学びと協働的な学びとが一体となった 鑑賞授業の開発

—タブレット端末を活用して—

甫出 頼之 井上 美由紀 横山 由季 権藤 敦子 寺内 大輔
(研究協力者) 長山 弘 中村 恵美子 伊原木 幸馬

Abstract: In this study, we focused on the advantages of tablets, which enable students with disabilities to advance their learning according to individual issues, and developed and verified classes aimed at realizing optimal individual and collaborative learning. As these students became more familiar with the tablets, they were able to devise their ideas independently, which led to mutual help and an exchange of opinions. In addition, by creating opportunities for students in the special-needs classes to actively participate while interacting with students in regular classes, a sense of achievement and self-efficacy were created, as along with an equal relationship with them.

1. はじめに

中央教育審議会による『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』(2021)では、2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型教育」として示した。これは、ICTの活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、「日本型学校教育」において重視されてきた「協働的な学び」とを一体的に充実することが核となっている。

「令和の日本型教育」の基盤として、2019年に児童生徒1人1台端末と校内インターネット環境を中心としたGIGAスクール構想が位置づけられ、2022年度末にはそのような学習環境が99.9%の自治体において整備されている(文部科学省, 2023)。こうした変化に伴い、文部科学省のウェブサイト“StuDX Style”では、GIGAスクール構想によって児童生徒に1人1台配布されたタブレット端末やノートパソコンの活用可能性を、教員を対象にわかりやすく示している。

本研究が対象とする音楽科教育や特別支援教育に関わるものも、複数の実践事例が紹介されているほか、児童生徒の身体や思考を拡張するツールとして、特別支援教育における効果的な活用の可能性も示されている。しかしながら、ICT環境を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」との一体的な実現には、前述の実践事例を参照するだけでなく、児童生徒の実態を踏まえて授業実践すること、そこで児童生徒がどのようなことをどのように学んだのかを検討することが不可欠である。

筆者らは次の3点に着目し、研究を構想した。

1点目は、タブレット端末の利点のひとつである、個別性に着目した音楽鑑賞活動のあり方である。例えば、音楽を鑑賞する活動では、従来、同じ音楽を全員が一斉に聴く活動が主流であったのに対し、タブレット端末とヘッドホンを用いることで、一人一人異なる楽曲を聴いたり、異なる部分を何度も繰り返して聴いたりすることができる。このことは、学習者に新たな学びをもたらすことが期待できる。

2点目は、タブレット端末やノートパソコン

Yoriyuki Hode, Miyuki Inoue, Yuki Yokoyama, Atsuko Gondo, Daisuke Terauchi, Hiroshi Nagayama, Emiko Nakamura, Yukima Ibaragi. Development of Lesson Plans for Appreciation Utilizing Tablets: To Integrate Optimal Individual Learning and Collaborative Learning

の特質である多機能性を生かした活動のあり方である。タブレット端末やノートパソコンは、文書作成機能、撮影機能、音声再生機能等、多機能を備えており、例えばスライド作成アプリケーションでは、複数の機能をつなげることがごく一般的となった。筆者らは、このようなトータルワークステーションとしての性格が、鑑賞活動における知覚・感受のアウトプットのあり方を広げる可能性があるのではないかと考えた。

3点目は、特別支援学級に在籍する児童と、通常の学級に在籍する児童との交流のあり方である。前述のように、GIGA スクール構想によってもたらされた ICT 環境は、様々な障害や特性がもたらす困難さに対する支援にも大きな役割を果たしてきた。筆者らは、このことが、特別支援学級に在籍する児童と、通常の学級に在籍する児童との関係性や、交流のあり方を変えるきっかけにもなるのではないかと考えた。

2. 研究の目的と方法

本研究では、前章で述べた背景を踏まえ、個別最適な学びと協働的な学びとが一体となった授業を、タブレット端末を活用して開発することを目的とする。

本稿で取り上げるのは、筆者らによる次の2つの授業である。1つは、小学校特別支援学級中学年に在籍する児童を対象とした生活単元学習「ミュージックビデオをつくろう」である（【実践事例1】 授業者：横山・長山）。生活単元学習として位置づいているが、児童が、自らの好きな曲を選び、曲とのつながりが感じられる画像や言葉を用いるという点で、音楽科における鑑賞領域の学びを活かした授業である。もう1つは、中学校特別支援学級に在籍する生徒を対象とした、3学年合同の音楽科の鑑賞領域の授業「音楽の特徴や音楽の感じを捉えて鑑賞しよう」である（【実践事例2】 授業者：甫出・井上）。タブレット端末と校内インターネット接続環境を活かした、個別最適な学びと協働的な学びのあり方を検討する。

いずれの実践も、授業中の様子を動画に撮影し、授業者の省察と筆者らの観察・協議をとおして、そこでの学びの実態を検討する。

本研究における研究倫理の取扱いについて、小学校においては、本研究の趣旨と個人情報の取扱いについて、対象児童2名の保護者、学校長に口頭及び書面で説明をし、本研究協力承諾

書に署名をいただいた。本稿の作成、公表についても対象児童の保護者、学校長の承諾を得た。また、授業記録は本研究の目的の範囲内で使用した。中学校では、入学時、研究に伴う紀要（論文など）や動画配信等で使用する個人情報の取扱いについて書面で説明し、生徒、保護者から個人情報等提供承諾書に署名をいただいた。

3. 授業実践と結果

3-1. 実践事例1（生活単元学習 21時間）

（1）単元名「ミュージックビデオをつくろう」

本実践は、児童が鑑賞作品を作ることで、曲想を感じながら鑑賞に親しんだり、それをきっかけに友達との相互のやりとりが実現したりすることをねらいとした。ここでの鑑賞作品とは、児童が好きな曲のイメージを動画にしたミュージックビデオ（以下、MV）のことであり、タブレット端末の Microsoft PowerPoint のスライドショーをビデオに変換し制作した。

（2）活動の概要及び単元計画

2022年9月～12月に、生活単元学習「ミュージックビデオをつくろう」（計21時間）を実施した。本研究の対象校X小学校特別支援学級の児童は、本学級のみ在籍し、通常の学級とは掃除時間、学年合同行事、週1回10分間の合同運動などで交流を行い、教科の授業交流は行われていなかった。交流の際は、特別支援学級児童は通常の学級児童に支援される関係性になりがちであった。そこで、学級の枠を超え、双方向の自然なかかわりが生まれる関係性や場の創出をめざして特別支援学級担任（以下、特支担任）と音楽科教員が協働で鑑賞授業を開発した。

本実践の対象児童は、タブレット端末を操作することが好きで、動画視聴や写真撮影を頻繁に行っていた。ある日、中学校の特別支援学級の生徒との合同学習をきっかけに、休憩時間にキーボードを使用して好きな言葉や自分の名前の入力をして楽しんでいた。また、音楽科の授業で、音楽に合わせて歌詞や写真が表示されるスライドショーに関心をもつようになった。スライドショーを見ることで歌を口ずさみ、教室で歌を聴き楽しむようになった。

特支担任は、こうした児童の様子を踏まえて、児童自身が「MV」を制作する活動に取り組むことにした。各児童が好きな曲を選曲し、スライドに歌詞の入力や歌詞に合ったイラストや画像

の挿入をした。音楽科教員は、授業で用いたスライドを例として児童に示したり、通常の学級との授業調整を行ったりした。「MV」は、特別支援学級と通常の学級（第2，3学年）の音楽科の授業の中で鑑賞会として時間を設け発表した。「MV」の発表後は、鑑賞者から感想を聞くようにした。

表1 【実践事例1】の単元計画

第一 次	タブレット端末でなにができるかな (4時間) 活動概要：タブレット端末を持ち、校内の好きな場所や物を撮影する。また、端末に入っているアプリのメモに文字を入力したり、検索サイトから動画が視聴できるページにアクセスして視聴したりする。
第二 次	歌詞クイズ(5時間) 活動概要：児童が好きな曲を聴いて、特支援担任が作成した歌詞の穴埋めクイズをする。
第三 次	ミュージックビデオづくり(8時間) 活動概要：スライドに歌詞を入力し、歌詞に合う画像を貼付してスライドショーを作る。そして、スライドショーをビデオ形式で出力し、「MV」を作る(写真1)。
第四 次	発表しよう(4時間) 活動概要：特別支援学級や通常の学級の音楽の時間に「MV」を発表する(写真2)。

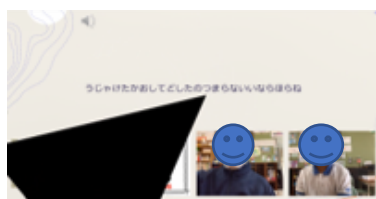


写真1 児童が作成した「MV」の例「WAになっておどろう(作詞・作曲 長万部太郎)」



写真2 通常の学級での発表の様子

(3) 児童の実態

X小学校知的障害特別支援学級に在籍する3年生の児童2名(児童A,B)を対象とした。児童の実態は表2に示す。

表2 【実践事例1】における抽出児童の実態

児童	実態
A	昆虫、動画、大人など興味・関心が限定的。人と簡単なやりとりができる。タブレット端末の操作や動画視聴が好き。
B	指示を待ち、与えられた活動をこなす傾向にある。簡単な問いに答えることができるが、問いを繰り返すこともある。ゲームや動画を視聴することが好き。

(4) 結果

両児童は、タブレット端末でキーボード、スライドショーや写真の活用の仕方が分かり、自力で何かを制作したい気持ちをもつようになった。本実践開始時は、動画の視聴ページに表示されるおすすめ動画をクリックして視聴することを楽しんでしたが、12月になると自分で見たい動画を検索して視聴することができるようになった。第二次の歌詞クイズでは、これまで聴き流していた歌詞が文字化されたプリントに取り組むことで、歌詞に注目することができた。Aは歌詞のなぞり書き、Bは歌詞の一部が空欄など個々の実態に応じたプリントを作成したことで、言葉に意識を向けることができた。

「MV」制作を進めるにつれて、両児童は次第に次に作りたい「MV」のイメージをもつようになった。そして、家族や、掃除、色組が同じグループの親しみのある通常の学級児童に見せたいという思いをもち、制作意欲が増していた。Bは、家のテレビで自分が制作した「MV」を家族と一緒に視聴したことがうれしくて、その後も父親に見たいことを伝えるようになった。両児童は、「MV」制作の要領が分かると、自分たちの好きな食べ物や色などの画像のスライドショーを作成するようになった。また、友達や教師の好きな物を聞いて、自分やその人が該当する画像を選択しスライドに貼付するようになった。その他にも、通常の学級児童にスライドショーの制作方法を教える出前授業をしたり、休憩時間に特別支援学級の教室でスライド

ショー制作イベントを開催したりした。児童は、キーボードの操作や画像の挿入方法などを聞かれると指さしや言葉で応答していた。これらの活動をきっかけに、児童は通常の学級児童の名前を覚えて話しかけたり、手と手をタッチして挨拶をしたりするようになった。

本実践終了後、通常の学級主催のクリスマス会に呼ばれ、児童は進んで友達にかかわることや自ら挙手をして感想を述べる姿が見られた。出前授業では、声が届くように口元に両手を当てて説明をする姿があった。このように児童は、必要性を感じた言動を進んで行うようになった。児童は、これまで挙手をして自分の意思を伝えることや大勢の人前での振る舞いなど経験が少なかったが、本実践がそのような発表の仕方を学ぶ機会になったことがうかがえた。

(5) 授業者による省察

本単元を通して、児童のタブレット端末活用能力の幅が広がり、タブレット端末を介して友達や家族との交流も増えたと思われた。児童は、周囲の人が自分の「MV」に関心を示し、出前授業やイベントで教える立場になったことで達成感や自己有用感が涵養されたと推察された。通常の学級児童の中には、「MV」をきっかけに自分たちも何かやりたいと発言をする児童がおり、特別支援学級児童に触発されたり親近感をもったりしていた。

本単元は、児童の興味関心を出発点とした構成や展開を図った。そして、学校生活で児童が活躍できる場の創出を行った。さらに、出前授業やイベント開催など交流の継続と発展を図り、双方向の自然なかかわりが生まれた。今後は、通常の学級の児童の変容も併せて考察することで、双方向の関係性が生成される要因を明らかにすることが課題である。

3-2. 実践事例2 (音楽科 3時間)

(1) 題材名「音楽の特徴や音楽の感じを捉えて鑑賞しよう」

本実践は、「曲当てゲーム」を通じて、生徒たちが意欲的に、「音楽の特徴」や「音楽の感じ」(曲想)を捉えて鑑賞することをねらいとした。

(2) 活動の概要及び題材計画

2023年1月～2月に、音楽室にて行った。本題材は3時間で構成される。

第1時の授業では、教師出題による「曲当てゲーム」に始まり、生徒が「曲当てゲーム」のルールを楽しみながら理解できるようにした。その後、「ヒントカード」の作り方を知る活動を通して、音楽の特徴と感じを捉える鑑賞の仕方を学ぶことができるようにした。その際、個々の生徒の実態に応じて「音楽の特徴を表す言葉をまとめた資料」を用いて理解を促した。また、聴き取った特徴や感じを表す言葉をタブレット端末に入力し、伝え合った。入力は、既習のアプリケーション「ロイロノート」を使用した。第2時の授業では、グループで協力し合う「ヒントカード作り」、第3時の授業では、グループごとにヒントカードを出し合う「曲当てゲーム大会」を行い、生徒たちが興味をもちながら、音楽を鑑賞できるように計画した(表3)。

表3 【実践事例2】の題材計画

第1時	音楽を聴いて言葉で表現してみよう
	ねらい：ゲームとして楽しみながら、音楽の特徴や音楽の感じを言葉で表現できる。 活動概要：「曲当てゲーム」とは音楽の特徴や音楽の感じが書かれた「ヒントカード」を2人の出題者が提示し、これから聴く2曲がどちらの出題者の「ヒントカード」で表現された曲か、当てるゲーム。本時は、教師が出題する。 次に、「曲当てゲーム」で出題者が出したような「ヒントカード」を作る活動を行う。はじめに、1つの曲をクラスで一斉に鑑賞し、その後、学年ごとの3グループに分かれ、各グループで話し合いながら意見をまとめ「ヒントカード」を作成する。最後に、グループごとに作成したカードを発表し合う。
第2時	「曲当てゲーム」のヒントカードを作ってみよう
	ねらい：グループで協力して、音楽の特徴や音楽の感じを表現した「ヒントカード」を作ることができる。 活動概要：3グループでそれぞれ違う曲を鑑賞し、それを「音楽の特徴」と「音楽の感じ」にまとめた「ヒントカード」を作成する(写真3)。ヘッドホンとイヤホンスプリッタを使用し、タブレッ

	ト端末に送った音源をグループごとに聴いて活動する。 課題曲：「交響曲第9番『新世界より』第4楽章」（ドヴォルザーク作曲），「ペールギュント」第1組曲より「朝」（グリーグ作曲），「ハンガリー舞曲第5番」（ブラームス作曲）
第3時	「曲当てゲーム大会」をやる
	ねらい：グループごとに発表した「ヒントカード」の音楽の特徴や音楽の感じを捉えて鑑賞し，「曲当てゲーム」の答えを導くことができる。
	活動概要：前時，グループごとに作成した「ヒントカード」を使用し，各グループが出題者となって「曲当てゲーム大会」（写真4）を行う。



写真3 (左) 「ヒントカード」作成

写真4 (右) 「曲当てゲーム大会」の様子

(3) 生徒の実態

Y 中学校特別支援学級に在籍する13名（第1～3学年）の生徒を本実践の対象とした。その内，抽出した5名の生徒（生徒 C, D, E, F, G）について，第1時の授業での実態を，授業動画，グループ毎の音声記録，授業観察者3名の記録から，2つの観点【①鑑賞に関わる表現力，②話し合い活動（協働性）】で整理し，表4に示す。

表4 【実践事例2】における抽出生徒の実態（第1時の授業）

生徒	実態 ①鑑賞に関わる表現力 ②話し合い活動（協働性）
C 1年男子	①音楽の特徴や感じを「速い」「楽しくなる」等の短い言葉で表現する。 ②仲間の感じ方を聞き，「どうだろう」「〇〇くんがいいと思う」と自分の思いを進んで伝えることができる。
D	①音楽の特徴や感じを捉え「急に音の大きさが変わる」「ワクワクしてみん

1年男子	なが楽しめる音楽」等詳しく表現しようとする。 ②仲間の感じ方について進んで意見することは少ない。
E 2年女子	①音楽の特徴を「音楽の特徴を表す言葉をまとめた資料」を参考にし「最初から最後まで速い」と表現する。 ②仲間の意見に関心があり比較することはできるが，自分の思いが強く，仲間の意見を汲み取りまとめようとする姿は見られない。
F 2年女子	①音楽の特徴や感じを捉え，「リズムは跳ねる感じで細かい」「勢いがある」と表現する。 ②仲間の意見を聞き，比較しながらまとめようとするが，自分の考えを生徒Eに受け入れられず，困惑する場面があった。
G 3年男子	①音楽の特徴や感じを捉え「リズムが激しい」「運動会っぽい感じ」と表現する。 ②仲間の意見を丁寧に聞き取り，同意を得ながらカードを作ろうとする。

(4) 結果

初めてヘッドホンを使用した鑑賞活動であったこと，そしてグループごとによるクイズ形式というゲーム的要素もあったことで，意欲的に授業に取り組む姿が見られた。また，繰り返し鑑賞したり，積極的に意見交換を行ったりする様子が見られ，協力をしながら「音楽の特徴」や「音楽の感じ」を発表することができた。

(5) 授業者による省察

抽出生徒の個別最適な学びと協働的な学びに関わる変容，成果と課題を挙げて，本実践授業を省察する。

1) 抽出生徒の個別最適な学びと協働的な学びに関わる変容

抽出生徒の第1時の実態と，学習内容が発展していく第2時，第3時の学習の様子を授業動画，グループごとの音声記録，授業観察者1名の記録から比較・分析し，個別最適な学びと協働的な学びに関わる変容を表5に示す。

表5 【実践事例2】における抽出生徒の個別最適な学びと協働的な学びに関わる変容

生徒	変容 ①個別最適な学び 変容 ②協働的な学び
C 1年男子	①第2時の授業では、個々に鑑賞した後「速くて、大きい音がする」と入力していた。第3時の授業では、「この曲は眠たくなってきたー」と言い、「この曲、ゆっくりだと思おう」と、ヒントから曲を正しく選んでいた姿から、音楽の特徴や感じの捉え方を理解してきている様子がうかがえる。 ②第3時の授業のヒント発表練習の場面で、「誰からやる？」と仲間に関わりかけたり、発表用に手書き入力した文字の間違いを指摘された時には、素直に聞き入れて直そうとしたり、仲間で作業する意識が高まっていた。
D 1年男子	①第2時の授業では、音楽を集中した様子で聴き、その後、自主的にカードへ入力していた。伝え合う場面では「音が急に強くなったり弱くなったりする。」等、自信をもって答える様子が見られた。 ②第3時の授業でヒントの発表練習の場面では、仲間に積極的に話しかけ率先して練習を進め、自分から関わる場面が増えた。
E 2年女子	①第2時の授業でのヘッドホン使用に学習意欲が高まり、繰り返し個別で聴こうとする様子が見られた。音楽の特徴や感じを「音楽の特徴は、最初はやわらかかった。最後はとても速くてびっくりした。」と表現し、できるだけ詳しく伝えようとしていた。 ②生徒Fの音楽の感じの発表の後、この意見に関連付けて意見を述べ、仲間の意見によって自分の考えを深める様子が見られた。仲間の思いを知り、よりよくまとめようとする事はまだ難しいが、第3時の授業では、生徒Fの答えを尊重する態度が見られた。
F 2年女子	①「さわやかな感じで、最初は柔らかい音であとからかたい音です。自然の中にいるような心が温かくなる感じ」と緑色や黄色の色で文字入力し、音楽

	から色もイメージしている。文字に色を付ける工夫は、第1時の授業の3年生の発表を参考にしたと推察される。 ②第2時の授業で仲間の発表を聴き「確かに。私も小学校の時に聞き覚えがある。」と同意したり、第3時の授業では、「ヒントを見ながら考えるといいよ。」と仲間に助言したり、「曲Bが3年生だと思う理由は、音が強い時には速くて…ヒントの通りだったからです。」と仲間に分かりやすく自分の考えを述べたりし、自分の考えを仲間により良く伝え、まとめようとする姿が見られた。
G 3年男子	①第2時の授業では、「リズムが活発で踊りたくなるような曲。歌いたくなるような曲」等、自分の感じ方も取り入れ入力し、音楽の特徴や感じを豊かな言葉で表現するようになった。 ②第2時の授業では、率先して仲間の意見を聞いて尊重していた。また、意見をまとめるために、自分の意見を修正して提案していた。第3時の授業では、答えが他の仲間と違うことに気づき、再度聴き直し、よく考えた後、自信をもって自分の答えを出していた。

2) 成果と課題

本実践の成果と課題を、個別最適な学びと協働的な学びの視点で、生徒の姿から述べる。

①成果

(個別最適な学び)

どの生徒もタブレット端末を扱うことに興味・関心があり、本実践授業でも用いたことで意欲的に学習に取り組む姿が見られた。また、生徒は、他の題材や他の教科でも「ロイロノート」を使った経験があり、見通しをもって取り組めたり、教師から送られた課題を受け取ったり提出したりする手順を繰り返すことで、活用方法の理解を深めたりすることができていた。

第2時の授業で、ヘッドホンやイヤホンスピーカーを使った場面では、自分たち又は自分だけしか聴こえない音楽に集中し、聴くことができていた。また、グループでも個人でも音楽を聴くことができる環境のため、再度1人で聴こうとする生徒がいたり、自分たちで作ったヒントカードが適切か確認しようと呼びかける生徒

がいたり、主体的な姿が見られた。

タブレット端末に言葉を入力する際は、習得しているスキルを活用し、自主的に色や大きさを工夫し、伝えようとする生徒がおり、個々の実態に応じた表現ができていた。

音楽の特徴、音楽の感じの視点で鑑賞する学習を繰り返すことで、音楽の聴き方が広がり、表現する言葉が増えたり、区別して言葉を使おうとしたりする姿が見られた。さらに、教師が個々の実態に合った問いかけをすることで、問いを理解し考えを深め、自分が知っている言葉を使って応えることができていた。また、「音楽の特徴を表す言葉をまとめた資料」を準備したことで、言葉の意味や使い方を知ることができたり、言葉を組み合わせる表現しようとしたり、一人一人の考えを深めることができていた。

（協働的な学び）

タブレット端末操作に困っている仲間がいた時に、進んで教えようとする姿が見られた。また、仲間の入力方法の工夫を見て、その良さに気づき、自分も新しいスキルを身に付けようとする姿や自然に教え合う姿が見られた。

グループ活動では、お互いのヒントカードを見せ合ったり、仲間と一緒にヒントカードを作ったりする場面が繰り返し設定されていたことで、表現する言葉の数が増えたり、他者の意見を聞き自分の考えを広げようとしたりする姿が見られ、進んで互いの意見を知らうとしたり、役割分担しようとしたりするなど、お互いに関わることが学習の一部として位置づいていた。

②課題

（個別最適な学び）

タブレット端末の活用意欲は高いが、入力方法にこだわり時間がかかったり、授業に関係ない動画を見ようとしたりし、学習目標や課題から逸れることがある。そのため、生徒によっては適宜教師による適切なサポートが必要であり、教師としてタブレット端末の活用スキルの差への対応・支援方法を考えることが課題である。

（協働的な学び）

ヒントカード作りでの話し合い活動では、互いの意見を出し合い、比べ、まとめる力が必要である。学年ごとのグループであったため、話し合いのスキルの差が見られた。話し合い活動などの協働的な学びを他の教科等でも積極的に行うことでこの課題を解決していきたい。

4. 考察

個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実していくことの重要性が提唱される中で、ICTの活用等も取り入れた新しい学習活動が、個別最適な学びや協働的な学びの充実に効果を上げているかを確認しながら、授業改善を行うことが期待されている(中央教育審議会, 2021)。

音楽科教育では、これまでも視聴覚機器を用いるなどの活用は行われているが、ICTの利点を踏まえて、「様々な感覚を働かせて音楽科の学習の特質に合わせた活用」を行うこととともに、新しい機器やアプリケーションの多彩な機能の中から厳選して、児童の感覚を働かせたり、思考を活性化したり、工夫を促進したりすることができるよう配慮する重要性が指摘されてきた(文部科学省, 2020, p.92)。

特別支援教育では、新しい時代において、ICTは「合理的配慮を提供するに当たって必要不可欠なものとなりつつある」(新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議, 2021, p.21)とともに、今後は指導内容の充実や障害者の社会参画の促進等、「幅広い視点を踏まえて、バランスよく、着実に対応すべきである」と指摘されている(p. 22)。

こうした背景を踏まえて、本研究では、ICT環境として実現された1人1台のタブレット端末を活用して、小学校と中学校の特別支援学級で音楽鑑賞にかかわる授業をそれぞれ開発し、その検証を行った。【実践事例1】と【実践事例2】を踏まえ、音楽科の視点、特別支援教育の視点、新しい学習活動のあり方と深い学びとの関わりから、考察を行う。とりわけ、ここでは、特別な支援を必要とする子どもたちにとって、本研究で取り組んだ新しい学習活動がどのような有効性を示したかに焦点をあてる。

4-1. 音楽教育の視点から

【実践事例1】は、知的障害のある小学校中学年児童2名が在籍する特別支援学級で行われた生活単元学習であるが、タブレット端末で好きな曲を聴くところから音楽活動が展開されていく。「聴く」だけであれば、視聴覚機器を使った受動的な活動にとどまっていたかもしれないが、「タブレット端末でなにができるかな」という第一次の学習で、タブレットの撮影機能や文字入力、動画視聴などを通して道具としてのタブレットになじんでいたことで、1人1台端末

という環境がアフォーダンスとなって、「音楽を一人で聴く」活動から「自分の好きな音楽をミュージックビデオにして他者に鑑賞してもらいたい」という能動的な行動が導かれている。

タブレットで文字を入力したり、映像を撮ったりする機能に習熟することで、その機能をもっと使ってみよう、という意欲が引き出され、自分の好きな歌の歌詞を自分のペースで入力できる楽しさを感じている。生活単元学習における各教科等を合わせた指導のよさが活かされ、「歌詞の内容」と関連して自分にとっての音楽のよさや面白さを見出し、味わって聴いたり、音楽の楽しさを体験して音楽に親しんだりして、音楽科の内容にも迫る学習が成立した。

【実践事例2】は、中学校特別支援学級に在籍する知的障害のある13名（第1～3学年）を対象とした音楽科の鑑賞授業であるが、これまでの鑑賞授業のように一斉に音楽を聴くのではなく、タブレット端末とヘッドホンを使って個別に音楽を鑑賞する、という活動を取り入れた。さらに、自分一人で何度でも音楽を聴くことができると同時に、イヤホンスプリッタを用いることで、友達と一緒に聴くこともできるため、受け身になりがちな鑑賞の活動に生徒自身が自分の判断で主体的に関われる環境を整えることができた。また、『曲あてゲーム大会』をやる」という、ワクワク感のある活動のゴールが設定され、タブレット端末を活用して「ヒントカード」という小道具を生徒自ら工夫できる楽しさが用意されるとともに、アプリケーション（ロイロノート）の活用により班での意見交流や、全体での意見の共有を可能にしており、生徒たちの学習に有効な機能がICTから適切に選択されている。

加えて、楽しんでクイズのヒントを考えることが、実は「生徒が自ら、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと、自己のイメージや感情（中略）とを関連付けて考えている」（文部科学省、2017, p.11）、音楽的な見方・考え方を働かせている姿となっている。「ヒントカード」は単なる小道具ではなく、音楽科の学習の支えとなる〔共通事項〕ア「音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること」（文部科学省、

2017, p.11）を踏まえ、「音楽の感じ」を捉え、その捉えを「音楽の特徴」との関わりについて考える、「思考力、判断力、表現力等」に関わる資質・能力を育む指導の工夫となっている。さらに、知覚と感受に基づく「ヒントカード」を各自が考えてグループで共有することで、他者の捉えに触れて理解を深めることができた。

藤村（2022）は、「個人による探究過程に、自他の思考を共有し、他者とともに思考の関連づけと本質追究を行う共同探究過程を組み合わせること」により、「多様な知識が関連づけられて思考の精緻化や再構造化が進むこと、さらに「自他の思考が対等なものとして尊重され共有されることにより、各個人の自己肯定感が向上し、協調的他人意識が高まることが期待される」（p.38）と述べているが、タブレット端末の活用とヘッドホン、イヤホンスプリッタという機器の活用が、個別最適な学びと協働的な学びを一体化させる上で有効だったと言える。

4-2. 特別支援教育の視点から

【実践事例1】では、AもBも、タブレット端末の操作やゲーム、動画を視聴することを好んでおり、その気持ちに寄り添いながら、道具としてのタブレットを前にして、キーボード操作や写真の撮影、画像の編集といった基本的に必要とされる機器操作の技能に習熟していく過程が大切にされている。また、好きな曲を聴いて、その歌詞の一部をなぞりがきや空欄補充というそれぞれにあった記入方法で書いてみることで、歌詞についても理解を深めており、個に応じた学習を通して、学習の起点となる知識や技能を身に付けている。

知識や技能を基にしながら「MV」のイメージを掴むことによって、「自力で何かを制作したい気持ち」が芽生え、友達や家族に見せたい、「他者に働きかける気持ち」を生み出した。そのことが「制作意欲を増し」、スライドづくりの活動が深まり、人前での発表の仕方を学んで「他者に伝える方法を工夫する」ことにつながっており、自ら判断して「必要性を感じた行動を積極的に行う」能動性を引き出した。これらの活動を通して、興味・関心が限定的であったり、与えられた活動をこなす指示待ち的な傾向であったりする児童の変容が引き出されたことは、児童の学習意欲や主体性を育む上でICTが有効なツールとなり得ることを示した。

しかし、それ以上に重要なことは、児童の主体的な取組を、通常の学級へのスライドショーの制作方法の出前授業や、スライドショーづくりのイベントとして、特別支援学級と通常の学級の教師が連携して積極的に企画し、特別支援学級の児童の学びの成果を活かした交流及び共同学習を実現することで、通常の学級の児童と、特別支援学級の児童との間で双方向の関係が生まれ、時には、教え、教えられる関係の逆転も生まれた点である。「MV」の取組を通して、児童が抱いた達成感や自己有用感は、「障害のある子供の自立と社会参加を見据え通常の学級と特別支援学級との連続性のある多様な学びの場の一層の充実整備」(新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議, 2021, p.21)を行うというこれからの方向性において、重要な鍵となる視点であると言えよう。

【実践事例2】では、3つの学年のグループに分かれて個人思考と集団思考を行い、音楽科の学習に取り組んでいる。障害の程度や特性がそれぞれ異なる生徒たちが一緒に学ぶ上でも、今回の授業でのICT活用が個別最適な学びを可能にするツールとして機能した。友達の入力方法を見て自分のやり方を工夫することができたり、教え合いをする中で他者と関わろうとする動きが生まれたり、話し合ったり支え合ったりするなかで、他者を尊重したり、承認欲求を満たされる場面があったり、「クイズをする」というゴールに向けた行動を自己調整しようとする姿が見られたりしたことは、教師が支えつつ、個別最適な学びを生徒が実現しながら、協働的な学びを行い、一人一人を伸ばすことができる可能性を示唆するものとなっていた。

4-3. ICTを活かした深い学び

奈須(2021, pp. 286-291)は、個別最適な学びと協働的な学びについて論じる中で、教師に求められる専門性として、教科等の本質、各教科等の特質に応じた見方・考え方を的確に押さえること、教科教育と生活教育の間に質の高い「知の総合化」を実現すること、丁寧な見取りに基づく深い子ども理解と、その子の今に即した的確な支援の実施の3点を指摘している。

例えば、【実践事例1】において、自分の好きな歌の歌詞を味わい、伝える方法を工夫していく中で、児童は「MV」を介して人と関わり、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・

能力へと結びつく学習を成立させている。【実践事例2】では、生徒自身が音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージを関連づけてヒントを考える活動を通して、音楽的な見方・考え方をそれぞれに精一杯働かせている。

また、教科の学習だけではなく、生活と結びついた学習と関連づけていくことの重要性は、

【実践事例1】における生活単元学習の例で示した重要な視点ともつながる。社会に開かれた教育課程の実現が求められる現在、教科の枠にとどまらず、学んだことをつなげたり総合したりしながら、子どもたち自身が自らの学びを計画、提案したり、チャレンジしたりできるように学習の構想をすることが、教科教育と生活教育における「知の総合化」という専門性へと結びつくと考えられる。

丁寧な見取りに基づく深い子ども理解という点では、特別支援学級における指導のあり方から学ぶところが大きい。【実践事例1】でも、【実践事例2】でも、子どもの個性とニーズを、担任と専科、あるいはT1, T2, T3等, TTを行う教師全員が授業の主体者として十分に把握し、学習活動における困難さが異なることに留意して個別の指導計画を踏まえつつ、指導内容、指導方法を工夫している。こうした教師の専門性の土台の上にICTを活用することで、学びの質も深めることができると考えられる。

タブレット端末などのICT機器は、大きく分けて、検索ツール、思考ツール、表現ツール、コミュニケーションツールとして有用であるとされる(佐々木, 2022, p. 48)。本研究の授業いづれにおいても活用されているそれらの機能が、どのように用いられるかという点から、小柳(2023)は、教師のICTとの向き合い方について、「①今までの授業の進め方に対して、ただICTやデジタルコンテンツを用いて、効率や効果を考えて、置き換えた方法や内容で進めているものか、②ICTやデジタルコンテンツのもつ機能を生かして、授業改善に向けて一歩踏み出している工夫がある活用をしているものか、③ICTやデジタルコンテンツなどを活用して、今までの授業で行われてこなかったこと、目指されてこなかったこと、新しい内容や方法にチャレンジしているものか」という3点の指標を紹介している。また、児童生徒がどのようなかかわりをもっているかという点について、「1)受

容的・受動的な学習活動を基本として ICT が活用されているものか、2) デジタルコンテンツや ICT を活用して、児童生徒が教材に働きかけインタラクティブ（双方向）に学んでいるものか、デジタルコンテンツや ICT を用いて児童生徒がインタラクティブに学んでいるのか、3) デジタルコンテンツや ICT を用いて、児童生徒が調べ考えたことなどを生かしながら新たなアイデアを作品として作り上げたり、アイデアや発見したことを提案したりプロジェクトを組んで社会参画するなどといった、クリエイティブな姿を示し学んでいるものか」という指標を挙げている（pp. 53-54）。

本稿における【実践事例1】では、児童は新たなアイデアから作品を生み出し、その作品を発表し、通常の学級の児童と双方向の関係を生み出している。また、【実践事例2】では、従来型の授業からは踏み出した工夫を行い、新しい方法へのチャレンジをすることができた。

ICT 機器を活用した授業を開発するにあたって、以上の指標をにらみつつ、児童生徒が主体的に取り組む授業になっていること、教科等の本質を捉えた深い学びが成立していることが重要なポイントとなると考えられる。

5. おわりに

全ての児童生徒の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現において、タブレット端末の活用は一つのツールとして教師の選択肢を広げてくれるものである。しかし、そこには、まず、従来型の授業観を脱し、そして、一人一人の特性に応じた活用方法を選択、駆使できる教師の専門性と、一人一人の児童生徒が端末を手に、見通しをもって、学習活動に主体的、創造的に取り組める授業の構想が不可欠である。個を見取り、一人一人の独自性、多様性を活かしつつ、学びの本質に向かって子どもたちが双方向にやりとりできるような協働的な学びと、その学びを通して、個としての意欲や能動性、達成感、自己肯定感が生まれ、協調的な他者意識が高まり、承認欲求が満たされる、といった、かかわり合う関係性の発展を意識した実践であることが必要である、と考えられる。

引用（参考）文献

- 1) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(2021)「新しい時代の特別支援

教育の在り方に関する有識者会議 報告」
https://www.mext.go.jp/content/20210208-mxt_tokubetu02-000012615_2.pdf
(2024/2/17 参照)

- 2) 小柳和喜雄(2023)「ICT活用による授業の変革と授業研究の動向」日本教育方法学会編『教育方法』52, 図書文化, pp.52-65.
- 3) 佐々木潤(2022)『個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門』明治図書出版.
- 4) 中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
(2024/1/13 参照)
- 5) 奈須正裕(2021)『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社.
- 6) 藤村宣之(2023)「探究的な学びを支える教師の専門性」日本教育方法学会編『教育方法』52, 図書文化, pp.38-51.
- 7) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』
https://www.mext.go.jp/content/20220419-mxt_kyoiku02-100002608_06.pdf
(2024/2/17 参照)
- 8) 文部科学省(2020)「教育の情報化に関する手引(追補版)」
https://www.mext.go.jp/content/20200701-mxt_jogai01-000003284_005pdf.pdf
(2024/2/17 参照)
- 9) 文部科学省(2023)「義務教育段階における1人1台端末の整備状況(令和4年度末時点)」
https://www.mext.go.jp/content/20230711-mxt_shuukyo01-000009827_01.pdf
(2024/2/18 参照)

附記

研究にあたっては全員で検討を行い、1. 2. を寺内, 長山, 3-1. を横山, 長山, 3-2. を甫出, 井上, 4. 5. を権藤が主に担当した。